

潜んだ。誠に食い物のたたりほど怖いものはない。

この村社は学校のすぐ裏にあり、学校の敷地はこの村社の前の山を削った土を平にして造成したものであり、急な斜面となっていて登るには五十段ほどの石段が社殿の前後二ヶ所にあり、その外にだらだら坂が学校の裏から東方に一本延びているだけであるから、この三ヶ所に見張りを出しておけば敵の侵入はすぐ発見できるので交替に三人が見張りとなり、残りは先生方に対する怒りをぶっつけ合っていた。

ところがこの見張りが逆に先生方に見つけられてしまった。

それとも知らず見張りも呼び入れ、お弁当を食べ皆で昼寝をしていたところ寝耳に水とはこのことである。突然ほっぺたをぶん殴られ、がばと跳ね起きてみると男の先生方がずらりと我々を取囲み、怒りの形相もの凄く我々を睨んでいるではないか。

そのうち、田辺教頭が瘦せ細った体の何処から出てくるか想像もつかない突拍子もなく甲高い声で『全員整列、職員室迄駆け足』と怒鳴った。途端に我々は一目散に学校めがけて走り出し職員室に並んだのである。それからが大変である、先生方が整列している可憐なる小学生達を替る替る鉄拳制裁したのである。特に信一と公男と精一は徹底的に殴られ目が見えなくなるほど顔が張れ上ってしまった。

しかし、この可憐なる少年達は紳士であった。誰一人としてこの大事件を親に告げる者はなく、一方先生方としてはこの非常時にストライキがあったなどと知れたなら校長の首が飛ぶこととなったのではあるまいか。

そんな訳で信一、精一、公男は危険人物視され先生方はろくに声も掛けなくなつた。

二 戦争時代

昭和十七年三月、この危険な少年達も目出度く卒業となった。信一は悪戯もするが勉強も出来たし、家も裕福な方だったので東一とともに岩手県で二番目に古い千厩農蚕学校に入学したが、悪戯こそ天才的に上手であったが勉強のほうはいたって出来が悪く、その上貧乏な精一は家で百姓仕事を手伝うことになった。喧嘩にかけては上級生だろうが下級生だろうが誰一人として大刀打ちできなかった公男は、その後東京に行き、やくざの何とか組に入って腕を磨き天晴な男になったが、のちに何を考え違いをしたのか故郷に帰り今ではひっそりと暮している。

さて私は同じ部落の一級上の孝雄と公平と三人組を作り、毎日順番に三人の家を回っては農作業をした。孝ちゃんも公平も私が卒業する前には組んで働いた訳ではないので私が働き掛けて組を作ったのであろうが、どうも私は組織を作るのが上手だったようである。今、私は大学で集団論を講義しているが私の集団論はストライキ以来の経験を踏まえた上での理論であり、だから学生が毎年千人以上も聴講するのではあるまいか。

私が今でも農作業が出来るのはこの三人組の時代に腕を磨いたからであり、あの当時は懐古してもよく働いたなと感心する。田植も、田の草取りも、稲刈りもいつも三人で働いた。尤も、酒も濁酒であったが随分と呑んだ。煙草も煙管ですばすばと吸っ

て大人になったつもりでいた。

しかし、この三人組は僅か一年で解散となってしまうた。理由は私が役場の小使になつたからである。

私の家では曾祖父が村長であつたが、その孫で私の父の弟の泰三も役場に入り、後に村長になつてゐる。

その泰三は当時筆頭書記をしており、これまた小使から書記補、書記と登り最後に助役となり、それから村長になつたのであり、これが最もオーソドックスな出世のコースだったのである。

その叔父は私が余りにも腕白小僧であつたので余り心良く思つていなかったようであるが、何を血迷つたのか私の役場入りを許してしまつたのである。

一方、私の方も何が何だか判らずに役場の小使になつてしまつたのである。

月給は金五円也であり、入り始めこそ温和しくしていたがやがて本領発揮ということになる。もっとも、昼は真面目に働いているが夜ともなると何処からともなく悪童共が集まつてきて役場の小使室でどんちゃん騒ぎをやるのである。

一番叱られたのは収入役室の金庫を鍵なしで開けられるかと云う議論の後、替る替る金庫のダイヤルを廻したので、翌日、収入役が出動して金庫を開けようとしたが余りにも皆で勝手放題に廻したので金庫のダイヤルが狂つてしまい、どうしても開けなくなつてしまい収入役に狂気の如くに叱られたことがある。

また、夜中まで濁酒を呑んでは馬鹿騒ぎするので近所からこれでは夜も眠れないと苦情が村長に届き村長に大目玉を食つたこともある。

そんな訳で役場でも持て余していた時、救いの神が現われた。千葉県の或る連隊で軍属を募集しているが、その職種は軍馬の扱いであり岩手県が軍馬の主産地なので、さぞかし馬の扱いに慣れた少年が多いだろうという訳で岩手県だけを募集地域に指定し、その通達を役場に流したのである。

この通達で一番喜んだのは門崎村役場であつたようである。助役さんが私を呼び、『これは素晴らしい事である。また、村の名誉でもある。精坊君は小さい時から馬に乗り、馬の世話も上手だと、兼々、泰三さんからも聞いている。精坊君を除いてこの村では推薦できる人物は見当らない。是非、村の名誉の為にも出征して呉れ』と言葉を極めての推薦であり、おつちよこちよいの私はそんなにまで名誉ある軍属に推薦して下さるとは勿体ないと感激し、即座にその何とか連隊に入隊することにしてしまつた。

昭和十八年十一月二十五日、村社で神主さんに蔽かにお祓をして頂いた後、歓呼の声に送られて勇躍何とか連隊に入隊したのである。

その何とか連隊とは東部百九十六部隊といい、乙種幹部候補生の養成部隊であり、旧制中等学校卒業者を一年程訓練し陸軍伍曹の肩書にしては戦地に送るための部隊であり、歩兵二中隊と砲兵六中隊とから成る連隊であつた。したがって、馬が多くその世話と各中隊長八名、大隊長二名、部隊長一名の乗馬の世話と朝夕の送迎が主な仕事であり、その外に将来馬の調教をするために乗馬の訓練とが一日の日課である。

私達が入隊した頃は未だ軍属舎が出来ていないので馬の糧秣を入れて置く倉庫が兵舎であり、狭い倉庫の中に十五人ほどの馬の扱いの上手な筈の少年達が押込まれた。

私は村長の直々の推薦でもあったのか三番目に偉い歩兵大隊長の当番ということになり、三明というアングロ・アラブ系の名馬を扱うよう命令された。

私が当番となった歩兵大隊長は広中中佐という方で当時としては珍らしく太った人で馬に乗るのが下手な癖に矢鱈と馬に乗たがり、朝夕馬で総武線の津田沼駅の近くから習志野の西外れの薬円台の部隊まで雨の日も風の日も通ったものである。

日中は馬の世話と朝倉軍曹という馬術の名人から乗馬の訓練を受けたが私は上達が早いほうであった。助役さんの推薦にもあるよに私は馬が好きで小さい頃から馬に乗り砂鉄川で水浴させたあと土手を駆け廻ったもので、乗馬も自己流ながら出来たのであるが、朝倉軍曹の乗馬訓練によって本格的な乗馬方法というものが身に付いたのである。また、三明という馬は流石にアラブ系の乗用馬だけあって疾走させると抜群の速さであり、また、障害飛越も上手であり私の乗馬術の上達は三明に負うところも大であった。

私は今でも動物が好きで犬か猫か鶏かを何時でも飼っているが、当時はこの三明が大好きで暇さえあれば三明に乗り、習志野の原を駆け廻ったが当時の習志野の原は周囲が十キロ四方もあり、いくら駆けても端に行き着くということがなく、或る時、軍馬手（私達軍属の正式の名称は軍馬手であった。）全員で遠出をしたことがあるが、駆け足が速くなると馬は興奮するものであり、あたかも競馬と同様になり騎手が制止させようとしても馬は止らなくなる。これを引掛けられるというのであるが、この時がそうであり、数キロも引掛ければやっと止ったときは全員真ッ青であった。この時も私の三明はトップであり、皆にお前が引掛けたと云われたが、これは私の腕が未熟だからであり三明が悪いのではない。

この時一頭の馬の蹄鉄が外れ蹄が丸坊主になってしまったのであるが、この時の乗り手は今では府中の刑務所の看手長をしており、柔道六段の猛者となっていた。

私と三明とは大の仲良しであり、習志野の原っぱでは三明は勝手に草を食い回り、遠くまで行ってしまっても私が呼ぶと走って来て何処までも私の後から随いて来るのである。ところで馬は飼い主に似るといいうが三明も私に似てむら気であり、すぐ興奮する癖があった。

或る時、何が気に食わないか突然私の顔を噛もうとした。無防備な私は下唇を三分の二ほど噛み取られてしまった。その瞬間『あっ』と云って唇に手を当てると唇が無いではないか。慌てふためき三明の足元の藁を掻きわけてみると一センチ位の血の塊が落ちていた。それを拾って大慌てに慌てて医務室に駆け込むべき所を獣医室に駆け込んだのが間違であり、獣医の中村中尉殿は馬の治療に使うヨードチンキを傷口に塗ったから耐まらない。今までもそっちこち怪我をして左の手の甲にはいまでも無数の傷跡が残っており自分でヨードチンキを塗り治療をしたが、これほどの激痛を感じたことはなかった。殆んど失神する一歩手前であった。

何分にも傷口が口そのものなので食事が出来ない。三日・四日ほど絶食したような

気がする。よほど良くなったので傷跡を鏡で見たら殆んど唇が無く、僅かに左の端に唇が残っているだけであり、この時は流石に樂觀的な私も「これでは俺は一生接吻できないな」と嘆いたものである。ところが若さとは素晴らしいもので一ヶ月もすると大体元通りになり、僅かに傷跡が残るだけに回復したのである。私は心の中で万歳を三唱した。萬歳というものは天皇陛下のためにだけあるのではなかった。

その内に我々軍馬手のための兵舎が完成し、全員そこに移り住むことになった。我々の班長は五十嵐軍曹殿であり六尺豊かな大男で、しかも敵めしい容貌の人であったが、この外觀とは裏腹に誠に柔和な方で我々うら若い擬せ兵隊達をこよなく愛して下さった。擬せ兵隊というのは我々の服装は一般の軍属とは違い兵隊さんと全く同様な軍服が支給され、相違は軍隊の階級を示す襟章が付いていないだけであり、加えて我々は騎兵の一種であるから乗馬用の長靴が支給されていたので、これを履いていると下士官とそっくりの外観となり、訓練兵は我々に敬礼をしたものである。

我々軍馬手の平均年齢は十六・七才であったからこの部隊では最年少であり、可憐なる擬せ騎兵達は隊内では皆に可愛がられ、給食所に食事桶を持って給食に行くと、どの中隊よりも多く山盛りにサーブスして貰うことができたので余り饑しい思いをしなくて済んだ。

それに驚いたことに月給が多過ぎるほど高額であった。しかと記憶はないが初任給が七十円位であった。役場の小使の月給が五円であるから十四・五倍ということになる。しかも食事はただなので使い切れるものではない。当時の小学校の校長先生の月給が矢張り七・八十円だったというから我々の所得は今という高額所得者ということになる。

一年に二度ほど帰宅が許可されたので使切り切れない分を貯金しておき、纏めて二百円とか三百円を父に渡すのであるが父は一向に嬉しそうな顔をしなかった。当時の二百円は優秀な軍馬一頭分であり畑なら一反歩位は買えたのであり、事実父はその金を貯めておき後で川端の畑を買戻したようである。

ところで柔和な五十嵐軍曹殿は曹長に昇進し、我々の班長をやめられることになった。その後益に佐藤軍曹という何処かの専門学校出身の男が班長でやってきた。

この佐藤班長は矢鱈とビントを張る人で、しかも、自分の手を保護するため帯革（上衣を縛り、軍刀を差げるためのベルトのこと）で顔だけ目掛けて叩くので忽ち顔が赤紫に腫れ上ってしまうのである。この班長のお蔭で班内はお岩様のような少年達で一杯になってしまった。

しかし、我々も負けてはいない、反撃に出たのである。方法は勿論砲兵隊独特のやり方であり、蹄鉄作業場から馬の蹄の粉を秘かに持ち出し、それを班長殿の食事の中に入れるのである。特に御汁にはたんまりと入れるのであるが味噌の色と融和していくら入れても見た目にも味にも変化が生じない。砲兵隊数十年の苦心の結晶としての妙薬であり、これを飲むと必ず下痢をするのである。だから、毎日この薬を入れるとばれてしまうので、班長殿が便所に行く回数を計り、回数が少なくなったらまた入れるのである。このような医療技術を教えて呉れるような兵隊さんは何処にでもいた

のである。

ところがである。班長殿もまた砲兵隊上りである。この頃とみに胃腸が弱くなったのはかの妙薬のために相違あるまい、と確信し、或る日全員を集めて例の帯革で滅多矢鱈と少年兵を殴りまくったのである。

こと此処に至って我々軍属としては断固たる態度で、この暴虐で残忍な敵下士官を撃退させるべく作戦会議を秘かに開催し、実行に移したのである。その参謀総長となつたのがかく云う高橋軍属であつた。高橋軍属は一方の旗頭である須藤軍属と協議に協議を重ねた結果、軍馬手全員の名前を連記しその筆頭を須藤左学に、最後尾を高橋精一とし、私と須藤より年上の数名は真中あたりに散らばして記入し、彼等に被害が及ばないよう配慮した辞表届を作成し、しかも退職理由は一身上の理由とだけとして十五人中最年少で、しかも帯革でやられた傷跡の最も生々しいのを選抜した結果五名が選ばれ彼等が辞表届を副官小川少佐殿の元に提出することになった。

この小川少佐という方は一兵卒から身を起し少佐という平卒上りでは最高の階級にまで昇進された方であり、部隊内では誰からも尊敬され敬慕されていたので副官殿ならば必ず我々の要望を受入れて呉れるであろうと云う思惑からこの作戦を樹てたのであり、決して退職などしようという気はなかつた。

五人の決死隊が恐ろ恐ろ退職届を小川副官殿に提出すると副官殿は黙つてその退職届を見てから、今度は決死隊員の赤紫色に腫れ上つた顔をじつと見たが、やがて、『帰つてよろしい』と命令したとのことである。

結果は非常に敏速に展開した。息を殺して今か今かと待ち望んでいた我々に次の様な命令が伝達されたのは三日後であつた。「退職届を却下する。全員現職に精励すべし。班長は陸軍軍曹伊藤東蔵を任命する。」というものであつた。我々少年騎兵隊は歓呼の声を挙げて勝利に酔いしれた。新班長殿は岩手県出身とのことである。我々は小川副官殿の温情溢れる処置に感激し、一層の奮闘を誓ひ合つたのである。

特に私は須藤と手を取り合つて喜んだ。当時はそんなことを知らなかつたが江戸時代の一揆の際の連判状には主謀者を隠すため、所謂、唐笠連判として前後のないようにしたとのことであるが、我々の場合は須藤と私だけが犠牲になればという考えでやつたのであるが窮すれば通ずとはこのことである。

その須藤も一昨年癌で死亡してしまつた。その二年前に須藤と相談して東京で第二回戦友会を開催したのであるが、その時、二人で唐笠連判の話をし、「あれは幼稚な我々としては最高の傑作であつた」と確認したのである。須藤の告別式に参列し、最後の別れをするため棺の蓋を開けたとき思わず『須藤、お前は！』と大声を挙げてしまつた。遺族の方々が変な顔をされたので慌てて次の声を呑んだが、四十年後になつてもその顔を見た途端に軍隊言葉が出たのには我ながら驚いた。

また、我々の期待に依えて下さつた伊藤班長殿も昨年矢張り癌でお亡くなりになつたと岩手の戦友から連絡があつた。

こうして我が少年騎兵隊は空襲の続く習志野原で終戦まで軍務に精励したのであるが、終戦により兵隊達が続々帰郷するので馬の世話をする者は減る一方で、やむなく

残務整理係ということで一ヶ月も遅れて帰郷することとなった。

帰郷の際、特別手当として二千五百円を貰ったがこれは大金である、今の貨幣価値に換算すれば五百万円に相当する金額である。親孝行な私はそれに私の貯金を含めて三千円余をそっくり父に渡したのであるが、父はその金で待望の田を四反歩ほど購入してしまった。あと一年も待てば農地解放でただ同様の値段で買うことが出来たのである。祖父が土地を手離すのを見ていた父にとっては土地こそ命だったのである。さて、復員軍人の端くれである私は早速次の就職口が見つかった。昭和二十年の十月から岩手県木材会社という変な名の半官半民の会社に事務員として入社したのである。月給は金百円也である。終戦後二ヶ月で物価は三倍増したというのに軍属時代と同額である。改めて軍属が如何に高額であったか知らされた。

その会社には社長と社長の甥で農業学校を卒業した私と同年輩の青年と、これまた同年輩の女の子とが勤務していた。結局、社長を含めて四人の会社である。ところで私は百姓と馬乗りは人並以上であるが読み書き、算盤となるとからきし駄目であり、特にその当時の木材の計量単位は石高であり、一尺(約三十センチ)四方、長さ一丈(三メートル余)が一石である。この単位を用いて総ゆる材木の計量をするのであるが私にはチンプンカンプンで何が何だかさっぱり判らない。そんな訳で云われた通りに数字を並べるだけの毎日であったが、そんなこんなで一ヶ月半位たった或る日、社長が次の様な問題を皆に提起した。「直径一尺の丸太から最大何寸の角材がとれるか」と云うものである。早速計算してみたが答が出る筈がない。ああでもない、こうでもない、とやってみたが一向に埒が開かない。ところがである。女の子が十五分ほどで解いたのである。曰く、『七寸一分弱である』。すると社長は正解であるとう。この女の子は一の関市にある私立の裁縫女学校出身であり、その女学校は比較的程度の低い学校として軽視されていたのであるが天才ピタゴラスが苦心の末に編み出した幾何学を事もなげに解く才女を生むほどの学校だったのである。

私は案外しつっこい方なので何とくしてこの問題を解いてみたいと思いい週間ほども寝ずにといふほどではなかったが一生懸命に考えてみた。しかし、これは無理な相談である。先程も述べたように三定法の定理、つまり、ピタゴラスの定理が判らない限り絶対にこの問題は解けないのである。

今迄私は学問というものを馬鹿にしてきた。「学問など判らなくとも生きて行ける」と確信してきたし、自分の無能を弁護もしてきた。しかし、今、私は愕然としたのである。たかが十八・九の女の子が解ける問題を大の男の私が解けぬとは何事であるか。どうも俺は材木屋にはむかないと思っていたがそれは基礎となる学問が無かったからである。こうして私は初めて学問の大切さを痛感したのである。

そうなると矢も盾も耐まらなくなるのが私の性格である。早速勉強を始めようと志を樹てたのであるがその方法が判らない。ところが困り果てていた私の頭にピカリと閃いたのが滋司のことであった。滋司とは私の小学校時代の同級生であり秀才の誉れ高い男で岩手県南の雄、一の関中学校を卒業した後、福島経済専門学校(今の福島大学経済学科)に入学したが戦争末期の食糧難のため帰郷し、村の診療所の事務をアル

バイトとしてやっていたが、居心地が良かったと見え学校に行く気配もなくずるずると居すわっていたのである。

善は急げである、会社の行き帰りの道端にある診療所を尋ね滋司にこのことを相談した。すると彼は『お前は俺と同じで、もう十九才だ。勉強するのは遅過ぎる。いい加減な気持ちで学問なんか出来るものではない。現に俺ももう学問など諦めかけているところだ。やめた方がよい。』と云うのである。

しかし、この時点で私の決意はどんな巨大なハンマーでも打ち砕くことは出来ないほど強固になってしまっていた。何せこうだと思ひ込むと後に引けないのが私の性格である。今までの悪戯もやると決めたら止めることが出来ないからやったのであり、勉強も全く同様だと確信していた。

そこで私は滋司に例のピタゴラス一件のことを話して是非とも俺を男にして呉れと懇願した。滋司は私の小学校時代の行状を熟知しているので、あれほど勉強の嫌いな奴が今更学問でもあるまい、と思っているから仲々『うん』と云わない。話をしている内に雲行きが怪しくなり遂に喧嘩別れとなってしまうた。

それでも諦め切れずに「よし、独学だ」と決意したが、土台勉強の仕方が判らないから慈司に相談したのであり、これでは振り出しに逆戻りである。

何日かして滋司が私の所にやってきた。『いい所を捜してきたのでこれから見に行く。』というのである。その雰囲気から私もこれは何か良いことがありそうだと思ひ彼に随いて行くと、なんと、そこは昔私が「お福」に行つたおシンコさんの家ではないか。

一体、滋司という男は頭が抜群な上に男振りも抜群であり、しかも私とは正反対に優しい心根なので女性という女性は悉くこの男に惚れこんでしまうのである。特に中年以上の女性からこよなく愛されるので、こと此の事に関しては兼てより心良く思つていなかったが今回の事件以後彼の優しさに私も惚れこんでしまった。

彼はおシンコさんを口説いて広大なおシンコさんの家の一室を借りて、そこで私を特訓しようというのである。彼としては出来の悪い精坊を教育するには生やさしいことで出来るものでないと判断し、誰からも干渉を受けない所を捜し出したのである。おシンコさんは人の良いことで評判の婦人であり、しかもこれから毎晩滋司が来るというので心良く一室を提供したのである。

「善は急げ」である。早速その晩から特訓が始まることになった。

特訓を始める前に滋司は私に、『学問というものは矢張り学校でやるものであり、体系的に学ばないと身に付かないものである。そこで、お前は一の関の夜間中学に入学した方がよい。あそこは月謝も安いし、夜間なので働きながら勉強できる。しかもあそこには相当年輩の人も入っているからお前には最適である。そこでこれから勉強して二年に編入することだ、そうすると二年間で卒業できる。』と云うのである。

学校制度とはどうなっているか皆目見当も付かなかったので滋司のこの言葉に私は驚いてしまった。後になって判明したのであるが当時岩手県には夜間中学が三校あり、県立が盛岡に、市立が釜石に、そして私立が一の関の関城中学であった。三校と

も小学校高等科二年卒が入学資格であり、三年の修業年限で旧制中学校の卒業資格が与えられるというのである。

私は小踊りして喜んだ。しかもその二年生へ編入し僅か二年で中学卒業の資格まで取るというのであるから、まさに鬼に首を取ったようなものである。勉強は出来るは卒業は出来るやらで、私はこの話を聞いただけで卒業した気分になり有頂天になってしまった。獲らぬ狸の皮算用とはこのことである。

この果しない希望を抱いて編入試験受験のための特訓が開始された。確かに滋司の作戦は天才的である。彼は私に目的を与えて勉強をさせようとしたのである。そうではないと、元々勉強嫌いの精坊では長続きしないと見てとったのである。しかも、彼は私に算数と英語だけを教えたのである、そして国語は私は昔から講談小説が好きで猿飛佐助とか霧隠才蔵、清水次郎長や赤尾の林蔵それに国定忠治などの所謂「赤本」を読んでいた学校に来ては得々としてそれを皆に聞かせていたことを知っていたので、その程度で国語の試験は何とかなると読んでいたようである。実に恐るべき眼識というべきである。

昭和二十年の十一月の末頃から翌年三月の編入試験の前日まで彼による特訓は続いた。英語の教科書はどこからか仕入れてきた余程前に女学校で使用した「キングスクラウン」という部厚な本で、ジス イズ ア ガール から始まるものであった。

滋司にとっては馬鹿みたいな本であっても私の場合は英語というものは初めてのものであり、大体 A、B、C と云う言葉を知らないものであるから、先ずアルファベットから勉強しなければならぬ。涙ぐましい努力が毎晩続いた。会社から帰宅し大急ぎで夕食を食べ、七時頃におシンコさんの家に行き十二時頃迄勉強するのであるが、判らない所があると一時、二時になることも多かった。

算数は簡単な四則を基礎としてやった後、鶴亀算を方程式を用いて解く方法をくどいほどしつこく教わった。そしてこれが判ればその後の連立方程式を解くのにそれほど苦労しなくて済むということも判った。

英語の方は兎に角暗記するのが一番であるということで毎晩キングスクラウンを五ページから六ページ程丸暗記することにした。そうしないと編入試験迄に間にあわないのである。

滋司は仲々の教育者であり、勉強のあい間に旧制中学の学校生活のことや中学生達のパンガラ振りなどを面白可笑く話して聞かせたので私の夜間中学への入学希望はだんだんと膨脹し、編入試験直前にはまさにパンク寸前まで膨らでしまったのである。

このパンガラ振りの話は私に強烈な印象として焼け付きその後の生活に大きく影響するのである。

三月になると数学の方は因数分解に入った。毎晩々々、因数というものを分解したので目が真赤になってしまった。また、英語の方も文法を教わるようになってから比較的簡単に文章が理解できるようになってきた。どうも私の頭は物事の理屈が判らないうちは受けつけないように出来ているということも判るようになった。

編入試験の受験申込みも終り愈々受験日も近くなると流石に、若しかして駄目だっ

たらなどと心配するようになった。

英語は遂にキングスクラウンを一冊読解し終えた。数学は不等式に入ったところで試験となった。

この年、二年の編入試験を受けた者は私の外に一人だけいたので二人で関城中学校第二学年編入試験を受験することになった。

四十年以上も前の事なので殆んど記憶も薄れたが、英語は一年生用の教科書、といっても新聞紙大の紙にA五判に印刷したものを各自がその大きさに切ってページ毎に綴じたのが当時の教科書であり、本などと言えた義理のものではないが、兎に角、それを読まされ、その意味を質問されたような気がする。記憶が曖昧なところをみると出来はよかったのであろう。と云うのは国語や英語の回答に対し、数学の問題は今でも明瞭に覚えていいるからである。と云っても問題の内容ではなく二十問中の十八問が因数分解の質問であり、残りの二問が不等式の問題ということ覚えていたのであり、当然のことながら因数分解の十八問は正解であり、二問は回答不能であった。この時、私は滋司という奴は凄い男だと感激した。どうして彼は因数分解の問題が出るのが判ったのであろうか。いずれにせよ、これで合格確実と確信できた。

私の合格確信は確実のものとなった。三月の末頃に晴れて合格通知が届いたからである。私はその合格通知書を診療所で一人宿直している滋司の所にもって行き感謝感激の涙を滂沱として流し、それから二人で濁酒を呑んで乾杯し、さらにそれから、ふらつく足でおシンコさんの家に行き合格を報告し家中の人に祝福されたのである。

これに対して我が家の反応はいま一つであった。「どうせ精坊はやりたいことをやるのだから仕方がない」、程度の反応であったが母だけは喜んで呉れ、濁酒を都合して呉れたのも母であった。また、母は自分が一の関の出身なので一の関の駅前の知人の家の二階に夜だけ宿泊できるように手配をして呉れた。

三 関城時代

準備万端整い四月の新学期から関城中学校に登校することになった。入学金や月謝、それに陸中門崎駅から一の関駅までの通学定期代などは今迄の月給からおシンコさんに対する家賃など引いた残りを貯金して置き、それで全部賄うことができた。

滋司に対してお礼を出したかどうかは忘れたが、どうも余り大したことはしていなかったような気がする。恩人に対して失礼千万なことである。

さて、夕方五時頃の汽車で門崎駅を出て僅か十五キロ足らずの距離なのに三十分以上もかけて一の関駅に着き、それから徒歩で十分足らずで関城中学に辿り着くから家を出て駅までの徒歩時間を含めると一時間ちよとである。

当時の汽車は石炭不足のため亜炭というのを燃料としたため馬力が弱く急勾配になるとストップしてしまい、もう一度バックして力をつけてからその力を利用して再度坂登りに挑戦することが屢々であり、それでも登り兼ねると次に車掌が『全員降りて下さい』とアナンスする、すると全員降りて坂の下り口まで歩いて行き汽車が来るの